



町の秘境



川崎ゆきお

「秘境って町の中にあるんでしょうねえ」

「え、町から秘境へ行くのでしょ。山とか海とか、あまり人が行かないようなところへ」

「でも大体分かっていますよねえ。今はもう山は得たいが知れていますよ。山なら高いとか低いとか、勾配がきついつとか、谷があるとか、まあ、大体分かっていますよ。広いだけで似たような部品で出来ていますよ」

「それはそうだが、人目に触れないことが秘境だよ」

「でも行けますよねえ。見ることも出来ますし。航空写真もあるし」

「昔は人跡未踏の地があったんだがなあ」

「今でもあると思いますよ。人が踏んだ形跡のないところは、でも、それを言い出せば地球中全てに足跡を付けないといけない。何センチ間隔かでね。だから、以下省略で、数キロ先がここで変わらないようだ、もう踏まなくてもいいのですよ」

「君はさっき秘境は町にあると言ったねえ」

「行けない場所が多いでしょ」

「他人の土地だったりするしね。入れない場所は確かに多い」

「殆どそうでしょ。小さな住宅地でも、足を踏み入れられるのは道路だけ。これはレールのようなものですよ。そこしか歩けないし、行けない。それが大きな町になるともっと込み入っていますよ。こちらのほうが人跡未踏地です」

「でも建物などは人が使っているのだから、人の気配は十分あるので、秘境じゃない」

「しかし、それは限られた人しか踏めない場所です。山の中の秘境は入り込めますよ。険しかったり遠かったりしますがね」

「しかし、街中はやはり秘境とは言わないなあ」

「人為的に隠した世界。余所者を入れない場所、まあ私事の秘密の世界もあるでしょうねえ。これが秘境ですよ。一步譲りますが、秘境的ということです」

「なるほど」

「私は山野にもう秘境は感じません。山中に隠された里があるとか、滝の裏に洞窟の入り口があり、その先に桃源郷のような里があるとかね。そんなものもう知られていますよ」

「確かに街中には訳の分からないものがあるけど、そこにいる人は普通でしょ」

「そこなんです。そこを秘境だと感じない。それがポイントです」

「そんなポイント知っても何ともならないがね」

「ネットなんかもそうですよ。ウェブページです。色々と秘境が潜んでいます。作った本人しか知らないようなね。あるのだが、誰もアクセスしない」

「はいはい」

「つまり、現代の秘境とは自然界の秘境ではなく、人が作ったものの中に秘境が隠されている」

「だから町に秘境があると」

「そこへ持って行きたかったのです」

「持って行けましたかな」

「何とか」

「はい、ご苦労様」

了